

【事例 2】 障害のある子どもの事例 子育てのしづらさを感じていた母親からの相談

①事例の概要

相談者：母親

名前：優

年齢：2歳児

家族構成：父親、母親、長兄（4歳上）、次兄（2歳上）

②相談に至るまでの経緯

* 本児の姿

優は保育所で行われている子育て支援事業に参加していました。保育士は、以下のような優の姿が少し気にかかっていました。

- ・ 部屋に入ってくる際には必ず「おはよう」と大きな声で言うが、保育士が挨拶に応えてもそれに対する反応はなく、視線が合わない
- ・ 絵本の読み聞かせ時は、優の知っている“動物”や“もの”の名称が出てくると、読んでいる最中でも大きな声で「それは○○!」「あっ、○○だ」と言う
- ・ つぼ糊、小麦粉粘土、どろんこなどベタベタした感触のものに触れることを嫌がり触らない

* 相談のきっかけ

ある日、優は、帰り際に周りの誰もが近づけないくらいの勢いで、突然激しく怒り出しました。母親は大変困惑し、怒り出した理由を尋ねても見当がつかないとのことでした。その時の状況や母親の話から察すると、普段は自分で着るジャンパーを寒いからと母親が着せてしまったことが原因のようでした。母親が着せたジャンパーを脱いで、自分で着るところからやり直すことで怒りはおさまったのですが、他の親や子どもたちの前での出来事に母親は大変辛そうな様子でした。保育士は、母親に別の日に少し話を聴こうかと声をかけました。母親も同意し、初回面接相談がもたれることとなりました。

③初回面接相談

* 相談の主訴

相談の主訴はとにかく「子育てがしづらい」というものでした。具体的に母親が訴えたのは、以下の4点でした。

- ・ 食事の際の手洗い、入浴など自分が先で兄たちは後と決めているらしく、順序が逆になると突然キレたように怒り出す。そして、なかなか立ち直れず、壁に頭を打ちつけるので兄たちには我慢させている
- ・ 人ごみのなかへ行くと、人を避けようとせずわざとぶつかって行き文句を言うので、遊園地、公園など人の多い場所へ外出したくない
- ・ 好き嫌いが激しく、ヨーグルトやプリン、カレーライスも食べない
- ・ 発語は2歳過ぎ、しゃべるが意思疎通はできていない

* これまでの母親の対応

母親は、優の発達が気かりで、1歳6ヶ月検診の時に相談したり、以前から通っている幼児教室の先生に相談していましたが、どちらの担当者からも、「2歳を過ぎてことばも出て、自己主張もあるので心配し過ぎ」と言われることが多く、兄たちには感じなかった育てにくさを感じながらも、自分

の育て方や接し方が間違っているのだろうかと思っているということであった。

* 保育士の対応

保育士は、母親に活動中にみられる優の姿を伝えました。

- ・ おしゃべりは好きだが相手とのやりとりが成立せず、会話が一方通行
- ・ いつも通りが好きで、急な事柄の変更を受け入れることが苦手
- ・ 糊の感触は苦手だが、スティック糊なら活動に参加できる（感覚の過敏さがある）

母親は、「自閉症でしょうか？」と保育士に問いかけてきました。母親は、気がかりな点が頭から離れず、インターネットや書籍で調べていたと話しました。母親の中には、「もしかして」という気持ちと「これは当てはまらないから思い過ごしかも…」という気持ちが交錯しているように見えました。

優の様子からは、自閉スペクトラム症が疑われる点がありましたが、診断をするのは医師であり、保育士の役割ではないことを伝えました。ただ、母親の気がかりな点は保育士も同感であり、何よりも優自身がパニックになるほどの苦痛を感じていることが心配であると話しました。そして、まず優や家族の生活しづらい現実をどう改善していくかを考えることを提案しました。その上で、たとえば生活場面での優の行動や困っていること、改善に向かったことなどの具体的情報を集めることから始めました。

保育士から母親に伝えた具体的な助言としては、しばらく生活の手順や流れを変えないよう努力してもらうこと、変更する際は事前に伝えること、その際、言葉のみでなく、絵や写真、実際の物を見せるなど視覚的に確認して理解できるようにすることでした。保育士の助言を受けて、変更の事前予告や視覚に訴える提示の仕方などを取り入れてみると、以前よりスムーズにいったと報告を受けることも多くなりました。

さらに母親が、次年度から幼稚園か保育所かどちらを利用するのかを悩んでいたため、地域の資源の情報を集約し、かつ優君の姿を理解できる機関として児童家庭相談室を紹介しました。

④ 児童家庭相談室からの助言

児童家庭相談室の相談員より、優にとって、集団選びの際に大切にすることとして、以下の4点が助言されました。

- ・ 生活基盤を整えること（生活リズム）
- ・ 生活の流れを身につけ見通しをもって生活する力を育てること
- ・ 生活と遊びを大切にすること
- ・ 発達の課題に理解と協力が得られること

その助言を受けて、両親はさまざまな施設を見学しました。その結果、自営業という事もあり、保育所に入所することになりました。

⑤ 保育所への入所 診断や療育に向けて

* 母親と保育士による情報収集

入所もない時期は、母親と保育所で、毎日の連絡ノートと週1回の面談によって優の様子を確認し合いました。保育士は、家族の今知りたい事に答えつつ、優のもつ課題に家族が向かい合うことができるように心掛けました。

保育所の生活は、「いつも通り」を好む優にとっては見通しがつきやすいため、パニックは減少し

ました。また、毎日が規則正しいリズムで流れるようになると、できることが目に見えて増え、優自身も達成感を感じられたようです。一方で母親からは、家庭では不意の出来事に遭遇することも多く、パニックになることも少なくないと報告されていました。

このような母親と保育士のやりとりのなかで、優の状態や行動特性が少しずつ明らかになり、課題も確認しやすくなりました。

* 他児との関係

保育所では、少しずつ他児との関わりが増え、それに合わせて他児とのトラブルもみられるようになりました。トラブルは優の特性に起因して生じることが多くありました。たとえば、優が「間違いか正しいか」の二極だけで状況を判断し他児に関わろうとすること、また人との関わりの中にある暗黙の了解がわかりにくいことなどです。ある時は、他児が片づけの時にふざけるのを見て「まちがってる!」「まちがい!」と真剣な顔で怒り、周りがうるさくしゃべりはじめると「もうー!うるさ〜い」と静かになるまで言い続けました。

* 保育士の対応

相手の気持ち、場の雰囲気わかりづらく、暗黙の了解事項が認識しにくいという特性がある優が、社会で生きていくのは大変なことも多いのは事実です。親には、できないことを伝えるのではなく、常に優のもつ特性についての理解が深まるよう話をしていきました。暗黙の了解を自然に習得することがむずかしいという特性に対しては、優が対応する術を学ぶためには、「この時はこうします」と具体的に伝えることが必要であると助言しました。

⑥ 専門機関の受診に向けての保育士の対応

専門機関の受診に対しては、面談のなかでも揺れる気持ちや葛藤が大きいことがうかがえました。保育士とのやりとりのなかで優の変化を認識できるようになり、優の成長を実感するなかで、母親の気持ちにも「今、親としてできることをしたい」と変化がみられるようになりました。

保育士としては、「専門機関との連携がより有益な支援につながること」や、「発達課題を見極めるためには発達検査などを有効に利用することも必要であること」を助言し、経験のある児童精神科医を紹介することとなりました。そして、数回の診察や発達検査を経て、「知的障害のなり自閉スペクトラム症」と診断されました。母親は「診断がついたことは、正直複雑な気持ちです。でも、あの時、気づいてもらっていなかったら…今のこの子はないと思います」と語りました。診断後、両親は、優の発達の特性を知り、優を理解したいと思う気持ちが強くなったように感じられました。親向けの研修会を案内すると、両親が他の親と一緒に参加することもありました。逆に母親が、「親の会」主催の研修を保育所に紹介することもありました。

診断に関して絶望感や拒否感、葛藤がないはずがありません。早期に診断を受け入れ、立ち直りの原動力となったのは、母親だけに任せず、一緒に考える父親の支えが何より大きかったようです。